

大正銀座ウノつき推理録
文豪探偵・兎田谷朔と架空の事件簿

芥生夢子 Yumeko Azami



アルファボリス文庫

〈目次〉

プロローグ

第一章 恋文は詠み人知らず

第二章 からたちの花とオオカミ少年

第三章 ハートの施錠と狐憑きの乙女

エピローグ

4

13

58

144

345

プロローグ

大正十四年、銀座のとあるカフェー。

誰もが息を殺して注目する中、その女給は嗚咽を漏らし——ワツと泣き崩れた。

「先生のおっしゃるとおりです。私が……盗みました」

歓声があがり、待機していた警官が「犯人」を連れていく。

窃盗事件だというのに、まるでショーでも観ているような騒ぎだ。

浮かれている野次馬のあいだを通って、わたしは彼女のもとへ走った。

彼女——吉江さんは、新人であるわたしの面倒を見てくれたいた女給の先輩である。

「吉江さん……どうして……？」

「探偵先生の言っていたとおりさ。悪い男にすっかり騙されちゃった。チイ子、アンタはまだ若いんだから、アタシみたいになるんじゃないよ」

さめざめと涙を流していたさっきまでのしおらしさは影を潜め、いつもの気丈な口調で返事が来る。なんと声をかけていいのかもたっているうちに、わたしのほうが反対

に励まされてしまった。

錦紗の上に洋物の白いエプロン。この店の売りであるお仕着せを着たまま、吉江さんは警官に連行されていった。彼女によく似合っていた深い臍脂の縞柄が、視界の端にいつまでも色移りして残っていた。

今度は、わたしがその場に泣き崩れる番だった。

「結婚するはずだった恋人に唆され、無理やり盗みを働かされていたなんて……!? そのうえ相手はすべての罪を被せて逃げただなんて、可哀想な吉江さん……!!」

睫毛を震わせていると、女給仲間たちが駆け寄ってきて背をさすってくれる。

カフェーで働く者は、たいいてい訳アリだ。決していいとは言えない待遇で、男性客にすり寄る接待をしてでも、お金を稼がなくてはならない少女たちなのである。

年長だった吉江さんは、近いうちに女給の仕事はできなくなるだろうと、いつも将来を憂えていた。早くいい人を見つけて卒業しなきゃと、口癖のようにぼやいていたのだ。あんなに美人で粹だった彼女ですらそうなのだから、若さしか取り柄がない自分たちはどうなるだろう。わたしたちにとって、明日は我が身だ。

吉江さんを想って、みなで泣いた。

うら若き乙女たちの、美しい涙の連鎖。嗚呼、流行歌にでもなりそう。

「あのー、お嬢さん。思いっきり陶醉とうすいしているとこ悪いけどさ。さっきの話、ぜんぶ嘘うそだよ？」

「……は？」

突然、鮮やかな勿忘草色わすれなぐさが目飛び込んできた。

裏地に柄の入った裕あわせ。ロイド眼鏡めがねと山高帽やまたかぼうで飾り立て、首元はメリンスのショール。さらに細身のステッキまで持った派手な和洋折衷わようせつちゅうの男が、いつの間にか傍らかたわらに立っている。

ボマードの匂いを漂わせ、いかにも銀座の街をブラブラと歩いていそうな感じだった。わざとらしく同情的な表情でわたしの肩を叩き、耳元みみもとで囁いた。

「彼女は騙だまされていないし、逃げた恋人も存在しない」

「だって、あなたが！ あなたがさっきそう言ったじゃないですか！ だから吉江さんは、罪を認めたのでしょうか!？」

そう、たしかにこの男が言ったのだ。

『吉江は結婚詐欺さぎに遭い、言いなりになって無理やり盗みを働かされていた』、と。わたしが働いている『カフェー・レオパルド』では、先月末から金品の盗難騒さわぎが起こっていた。

頻発していたのは客が立ち入れない二階しなの支度部屋しどへいだったため、初めから犯人は女給に絞られていた。

店長は当初、嚴重注意のみで丸く収めようとしていたが、何日経っても収まらず、とうとう店の売上まで計算の合わない日が増えた。

そんな状況で、接待中になにかと小用で姿を消すことが多かった吉江さんは、容疑者の筆頭だった。しかし、彼女は店で一番古株のベテランだ。面倒見が良く、従業員のあいだでも慕われている人だったのである。

だからこそ、店長は正面から堂々と吉江さんを追及するのがためらわれたのだろう。下手をすれば、従業員全員から反感を買いかねない。

警察に任せたとしても、人望のある彼女が急に逮捕されたりしたら、みな心にどれほどの衝撃を残すことか。

というわけで、店長はあろうことか、目の前にいる怪しい男に盗難事件の解決を頼んだ。

なんでも、銀座の一部界限かいげんでは有名な「探偵」らしいのだ。

「要するに、盗まれた売上を取り戻すためにも犯人をちゃんと捕まえない。でも、なるべくなら後を引かぬような、穏便な形にしたい。そういうややこしい依頼が俺のところ

に來たわけだ。だから一芝居打ったのさ！」

一見すると、ちゃらちゃらした輕薄そうな遊び人にしか見えない。

疑惑の視線に気づいているのかいないのか、探偵はなぜかわたしに向かつて、すらすらと種明かしを始めた。

「あらかじめ犯人の目星はついていたらからね。俺は証拠を集めるだけでよかった。吉江って女給が稼いでいるチップの金額を超えて浪費をしていないか、化粧直しへ消える時間が増えていないか、とかね。ここまではよくある探偵業務なのだよ、うん。で、調査の結果、彼女が盗んだことは確定したからさ。あとは……」

自信満々、正々堂々とした態度で、探偵の男は言つてのけた。

「でつちあげさ!!」

「は!？」

でつちあげ。

それは探偵とは程遠い、嘘をまるで真実のように捏造する行為ではないか。

「え、え？　嘘なんですか？　吉江さんは犯人ではないの？」

「は、きみ、人の話はちゃんと聞き給えよ。吉江が犯人だとさっき言つただろう。でつちあげたのはそのあとだ。いいかい？」

信じられない発言を聞きながら、わたしはこの男が披露していた推理を思い返していた。

吉江さんは夫婦になる約束をしていた恋人に脅され、しかたなく盗みを働いていたのだという。

探偵は全員の前で、大げさな身振りを交えてそう語つたあと――

『嗚呼、吉江くん！　きみはなんて憐れで悲劇的な女性なんだ！　誰からも慕われ、この銀座の街を美しく舞う黒揚羽蝶のようなきみが、薄汚い蜘蛛の糸に搦めとられて罪を犯してしまうなんて！　ここにいますみなも、彼女を不憫だと思つたろう!？』

『先生のおっしゃるとおりです……。私が、盗みました……』

反芻してみると、わざとらしいこと甚だしいけれど、たしかこんな流れだった。

さっきはわたしも吉江さんの身に起こった不幸に酔いしれていたから、嘘臭さに気づかなかつたのだ。

「で、でも、なぜ？　吉江さんがあなたの嘘に乗った理由がわからないわ」

「だって、あんな話を聞けばみんな彼女に同情するだろう？　すでに容疑者として挙げられていたくらい犯行の口は甘く、露見するのも時間の問題だった。そこに俺のでつちあげた不幸話によって、自白しやすい状況ができたんだ。周囲の非難を浴びないよう、

ここぞとばかりに便乗して、さめざめ泣いてみせたんだよ」

では、わたしたち乙女の美しい涙はなんだったのだろう。

あの美しい別れは。視界に残った着物の色は。

なにより、あのうつとりした空気は!?

「うう、納得はできないけれど……警察が事情を汲んでくれて、吉江さんの罪が軽くなるのならいいわ……」

最後まで彼女を慕う健気なわたしの像は、またしてもあつさり壊された。

「なるわけないじゃん。警察はそんなに甘くない。本人もそれを狙って自首したのだろうけど、架空の恋人が存在しないことくらい調べりゃわかる。まっ、俺は穏便な逮捕までの依頼しか受けてないし、後のことは知らないね。というかきみ、財布の中身を三度も盗まれたのに、まだ同情するのかい? 俺のでっちあげた作り話がすつごく効果的だったみたいで嬉しいな。あの女は盗むだけ盗んで、裏では故郷にトンズラする準備を進めていたのにさ。はははは」

すらすらと流れるように回る舌。

気障な仕事で帽子の角度を直しながら大笑いする男に、猛烈に腹が立つてきた。

いったい、この人はなんなのだろう。

他人の人生に首を突つ込む以上、探偵は使命感と正義感を持った、思慮分別のある好人物であるべきではないのか。

「あ……あなたには、探偵としての矜持きやうじがないんですか!」

「お嬢さん、俺の本業を教えてあげよう。今をときめく探偵小説家の兎田谷朔うづみだ やはるめだ。小説家が架空をでっちあげてなにが悪い!? 地獄の沙汰さたも口八丁。解決さえすりゃ、真実なんかいらないのさ」

ポカンと口を開けて呆気にとられているわたしに、自称文士の男は続けて言った。

「犯人はちゃんと逮捕されたし、盗まれた金品も彼女の家から無事に押収されるだろう。店長の依頼どおり、みなが同情的でよいな怒りや憎しみが生まれることもなかった。いやあ、本日も完璧に気持ちよく事件を解決したなあ。犯人が雰囲気呑まれそうな性格だと思ったからこうしたわけだけど、きみも同じ素質があるから気をつけたほうがいいよ。忠告のため、特別に種明かしをしてあげたんだからね」

「よいいなお世話です!!」

もう我慢ならないと罵倒ばとうしそうになったそのとき、店のドアが乱暴に開かれ、真鍮しんそうのベルがからからと鳴った。

「先生!! 兎田谷先生、カフェーなぞで遊んでいらしたのですか!? もうメ切が!!」

入ってきたのは背丈が高く、体格も立派な、目つきの鋭い強面の青年だった。

「ヒツ、暴漢!」

「うちの書生だよ。そろそろ原稿を進めなければ、彼が憤死してしまうな。お嬢さんも、困り事があればいつでも俺のところへ依頼に来給え。では、これにて失礼!」

住所の記された紙片をささと懐から取り出してわたしに押しつけると、探偵は二重廻しのとんびコートを羽織って去っていったのだった。

第一章 恋文は詠み人知らず

大正十二年九月一日正午に関東を襲った大震災から、まだ一年半。

帝都の中心地だったこの銀座も、大半が焼けて壊滅状態だったらしい。

建物にはまだ被災の爪痕が残っているし、住民も地方へ出ていつて随分減ったそうだから、人々が復興のために必死で協力し合ってきた結果、現在は繁華街の賑わいを取り戻している。松坂屋などの巨大なデパートメントが建ち、ダンスホールやカフェーが相次いで開業した。

洋装のモダンな男女が並木通りを闊歩する銀座。

住み始めてまだ間もないわたしも、尖端的で華やかなこの街が気に入っている。

「松坂屋の交差点を小学校のほうにずっと進んで、左手に曲がった先の山城町……あつた、ここだよ」

住所の記された紙片を握りしめ、『兎田谷』の表札がかかった家の前に立った。

やや古いが、ごく普通の庭付きの民家だ。わたしが働いているカフェからさほど離れていない。

ぼかし水玉模様の銘仙めいせん着物にショール、束髪そくはつの毛先には小さなリボン。自分の装いよそおを確認し、戸口で声をかける。

「ごめんださいませ」

奥から「はい」と予想外に低い返事が響いた。

足音さえもひどく重い。一歩ずつ近づいてくるたび、猛獣のような威圧を感じる。

恐る恐る待っていると、手に包丁を握った強面の男が戸を引いて現れた。

「……何用だ」

「ヒツ、博徒ばくど!」

「暴漢でも博徒でもない。小弟しやうていは先生の弟子だ。住み込みで身の回りの世話をさせていたでいる」

よく見たら、この前カフェで会った青年だ。

「なぜ包丁を……?」

「魚を卸おろしてただけだ」

どうしてもドスを持って賭場とばにいる類たぐいの人間に見えるせいで、二度目なのに驚いて

しまった。

言われてみれば、着物の下に立襟たてえりのシャツを着込み、袴はかまを穿はいた書生らしい恰好かっこうをしている。髪型は七三に分けた刈り上げで、地震の後に流行はやっていた震災刈り風だ。爽やかで清潔感のある髪型だが、彼がやると怖さが際立つ。

「新しいものの好きの先生にやられたんだ。洗いざらして済むからずっとこの頭髪かみにしてるのが、似合わないだろうか」

わたしの視線に気づいたようで、不愛想ながらも照れくさそうに頭を掻かいている。

見た目より怖い人ではないのかもしれないと思っていると、なぜか懐おこころに仔猫を入れているのに気がついた。

「なぜ猫を……?」

「先刻、道端で拾った。腹を空すかせているようだったので、小魚をすり身にして与えてやろうと思っていたところだ」

絶対、良い人だ。見た目だけで人間を判断してはいけない。

胸中でそう反省し、一見ぶっきらぼうな書生に用件を伝える。

「探偵の兎田谷先生に、相談事があつて参りましたの」

「……ああ、そっちの話か。案内する」

少し残念そうにしながらも、わたしを居間に通してくれた。

「先生、客人です」

「烏丸、原稿依頼かね!? いったいどの有名文芸雑誌が——」

襖を開けると、例の軽薄そうな探偵が畳に寝転んだまま大声をあげた。

わたしの姿を認め、あからさまに気乗りしない様子で寝返りを打つ。

ふたりして落胆しているところを見ると、どうやら本業のほうの仕事を待ちわびていたようだ。

「やあ、いらっしやい」

「あの、寝たままでよろしいので、せめてこつちを向いてくださいます?」

弟子の烏丸さんが淹れてくれたお茶をすすりながら、わたしは改めて自己紹介をした。

「先日はお世話になりました。わたしはカフエー・レオバルドで女給をしている、チ子といいます」

「それ、店での名前でしょ。本名は?」

「構いませんが、必要なんですか?」

「べつに必要でもないし興味もないけど、普段隠してる人の本名って秘密を暴いた感じがするからなんとなく」

興味はないのか。

やっぱり、変な人。文士とはみなこういうものかしら。それとも探偵だから?

わたしは訝りながらも、不都合はないので隠さず答えた。

「本名は千歳です。国木田千歳。年齢は十八。カフエーの他に、商家に住み込みで女中

もしています。先生を訪ねるため、本日は午後だけお休みをいただいたんです」

「そんなに働いて、若いのに感心だな」

「僭越ながら、先生はもう少し働いてください」

仔猫をお腹に乗せてゴロゴロと遊んでいる兎田谷先生に向かって、烏丸さんが容赦ない一言を浴びせる。

自宅なのでこのあいだのように華美な装いではないが、それでもどこか胡散臭く、軽薄に見える人だ。

「俺だつて働きたいのは山々なんだけども。原稿の依頼が来ないのだから、望んでも詮無い話じゃないか。しかたなくこうして遊んでいるんだよ。ああ働きたい」

「えっ」

文学に明るくないわたしが知らないだけかと思っていたが——こんなに自信家なのに、もしかして売れていないのかしら。

「顔に出てる、出てる」

「あつ、ごめんなさい。でもわたし、相談事をする前に目くらい通しておこうと、先生のご本はすべて買いました」

「寝巻のままで大変失礼した。きみ、ぜひ来月の新作も頼むよ。きみの購買力に俺の生活がかかっている！」

ものすごい早さで態度を変えて、わたしの湯呑みにお茶のおかわりを注ぎ、仔猫を手渡してきた。撫でていいらしい。

「で、どうだった？ 面白かったかね？ 稀代の天才だか思ったかね!？」

「わたし、小説はよくわからないのですが」

「うんうん、構わないよ。きみが感じたままに、率直な絶賛を浴びせ給え」

「先生の探偵小説……主人公の決め台詞が『探偵は真実しか言わない』って、先生とは正反対のまっとうな探偵ですね」

「あー、そーねー」

またしても素早い変わり身。

寝めなかつたせいとか、または心底どうでもいい感想だったのか、興奮めした瞳でわたしから猫を取りあげた。小説を書く人間というのは面倒そうだ。

「千歳くんだったね。相談事って？ なんか萎えていろいろでもよくなつちやつたから、特別に見積りは無料にしてあげよう」

「あ、はい。一応身の上をお話ししますと、わたしの故郷は鎌倉の由比ヶ浜で、実家は老舗の旅館を営んでおります。ですが近年経営がうまくいかず、火の車状態で……借金返済を手伝うため、商いをしている親戚の家に住み込みで働くことになったんです。それで銀座にやつてきたのが昨年おととしの十月上旬、五ヶ月ほど前です。昼は女中仕事、夜はカフェーで女給をしています」

「うんうん、不穏な話になってきたね。ちよつと興味が湧いてきたな。それで!？」

先生が少年のように瞳を輝かせ、妙に食いついてきた。

派手好みと軽薄な態度のせいせいで若く見えるが、著作に記載されていた略歴によると、わたしより十は年上だったはず。

さらに酒癖や借金癖がひどいらしく、カフェーにやつてくる業界人のあいだで悪評になつている。いまさうだが、こんな人に頼んで本当に大丈夫だろうか。

「ええつと、ここから相談です。じつは今の家にお世話になつてから、お手紙をいただくようになったんです。頻度はきつかり月に一度で、届くのは月初めの一日。合わせ

て四通あります」

「ほう、脅迫かね。もしくは誹謗中傷か、借金取りかな？　そういうドロドロしたのは大好物さ！　それで内容は!?」

「恥ずかしいのですが……そのう……。すべてわたし宛の、情熱的な恋文みたいなんです……」

熱くなった頬を両手で包み、うつとりと手紙の内容に思いを馳せていると――

さっきの何倍も醒めた瞳の男が、無心で猫を撫でていた。

「帰ってくれ給え」

「なぜ!?」

「俺が本業そつちのけで探偵などをしているのは、人間の醜惡な側面や不幸を見聞きたいからさ。ひいては極めて純粋な文学性の追求のためといえる。そんな乳臭い小事件はお呼びじゃないのだよ」

「乳臭い小事件……」

さっき食いついたのは、わたしの境遇がわかりやすく不幸だったからのようだ。

一瞬唖然としたが、接待用の営業スマイルを作って奥の手を出す。

「ところで、わたしの常連客に某大手出版会社のお偉いさまがいるんです。解決した

暁にはご紹介しようかと思っていましたのに、残念ですが、ご縁がなかったようで――」

「続きを聞こうか。手紙は持ってきているんだろう？　ほら、早く出して。あ、撫でていいよ」

「ニヤア」

そう言いながら、またしても掌を返した探偵の兎田谷朔は、花が開くような笑顔で――やはり仔猫を渡してきたのだった。

持参していた四通を畳の上に置く。

ちゃんと封筒に入っているが、宛名も差出人もなく、本文も長いものではない。一筆箋に書かれた、たった一行の手紙である。

一通目

“恋するに死にするものにあらませば我が身は千度死にかへらまし”

（恋をすると死ぬものならば、私はもう千度でも繰り返し死んでいることだらう）

二通目

「いかにして忘るるものそ我妹子に恋はまされど忘らえなくに」
 (どうしたら忘れることができるのか。愛するあなたに恋心は増さりはしても、
 とても忘れられるものではない)

三通目

桜花時は過ぎねど見る人の恋の盛りと今し散るらむ
 (桜の花はまだ盛りを過ぎていないけれども、見る人の恋心の盛りの時にこそと、
 今まさに散っているであろう)

四通目

現にか妹が来ませる夢にかもわれか惑へる恋の繁きに
 (現実にあなたが来ていたのか、夢の中で私が迷ったのか、あまりの恋の激し
 さに)

兎田谷先生が一通ずつ手に取り、和歌の綴られた手紙を読む。

弟子の烏丸さんも師の背中越しに手紙を覗き込んでいた。

「ふむ、どれも万葉集にある歌だね。烏丸、どう思う？」

「小弟は、恋文を自分の言葉で伝えたいのは漢らしくないと思います」

「センスのない文章を垂れ流すよりは、幾分しやれているさ。若いお嬢さんはこういうの好きだろう。平安貴族みたいでいいじゃないか、たぶん。どうなのかね、千歳くん？」
 そう訊かれて、わたしは複雑な心境を打ち明けた。

「風流で素敵だとは思いますが……。これじゃ、わたしに激しく恋い焦がれていることしか伝わりませんよね。文通してほしいとか交際してほしいとか、はっきり書いていただかないと、正直どうしていいのかわかりません。まず、差出人もありませんから」「まさに詠み人知らず、というわけだね。しかし、筆跡が少したどたどしいな。達筆とはとても言い難い。差出人どころか宛名も書かれていないし、ただの手習いで歌集を書き写しただけだったりして。恋文は盛大な勘違いで、きみ宛ではないんじゃないの？」
 人をからかうときは生き生きしている。

出会ったときと相変わらず、失礼な態度の御仁である。

「そんなはずはありません！ 手習いなら、どうして意味深にも便箋にしたためて、封まで閉じて、わたしの部屋に置く必要があるというんですか！」

「きみの部屋に直接届いているんだよね。世話になっている家は商い^{あきな}をやっていると
言っていたけれど、差出人の候補になりそうな相手がいるの？」

「はい。同じ下働きで、ふたりの若い男性がいます」

「つまり今回の依頼は、きみに好意を寄せているのがそのどちらなのかを知りたいって
ことかな？」

「そうです」

わたしだってうら若き娘だし、故郷を頼りにできる境遇でもない。

殿方から想いを寄せられているのならば、吝^{やたら}かではないのだ。

「……ふたりねえ。きみの恋愛対象範囲内で、勝手に絞ったりしていないか？ 妻帯
者や年寄り、見た目が悪い者も考慮に入れるべきだ」

「除外しているのは、本当にあり得ない方だけですってば!!」

「ならいいけどさ。判明したとしても、相手が好みじゃなかったらどうする？」

「たとえ、そうだとでも……」

そのくらい、わたしにだってわかつている。

都合よく自分の理想の人に好かれるわけではない。

「もし、この相手はないなって思ったとしても」

「存外言い方がきついな、きみ」

「ちなみに兎田谷先生も、軽薄すぎてわたしは無理です」

「うるさいよ、小娘」

「——でも、気持ちそのものは、きちんと受け取りたいんです。詠み人知らずの、誰か
の想いを大切にしたい。それが、わたしの依頼です」

烏丸さんが先生の隣でうんうんと頷いている。

顔は怖い、やはり良い人だ。

「今日はもう末日だ。毎月一日という、明日にでも五通目の手紙が届くわけか」

「ええ。ですので、わたしの部屋に隠れて、どなたが恋文を置いているのか確認してい
ただけませんか？ 探偵は尾行^{びこう}や待ち伏せが主なお仕事なんですよ」

「ああ、その程度ならば簡単だ。楽な仕事だな」

烏丸さんはそう言ったが、先生は不満そうに口を尖^{とが}らせた。

「だめ、だーめ。簡単すぎてつまらない。というか、それだけじゃ確実にはわからな
いよ」

「どういうことですか？」

「手紙を書いた人間と、手紙を置いた人間が同一人物だとは限らないだろう。たとえば

誰かが道端できみを見初めて、同じ家に住む者に頼んだ可能性だつてあるんだ」

「なるほど……では、どうしたら？」

「明日になれば置いた人物の答え合わせはできる。確実に差出人がわかるよう、事前に周辺を調査しよう」

先生の言うとおり、せっかくならちゃんと調べてもらったほうがいい。

よろしくお願いしますと、わたしは深くお辞儀した。

「あ、でも、差出人や周りの方々に調査をしているのが知られないようにしてもらえますか？」

「べつにいいけど、理由は？」

「恋文をもらったからつて、浮かれているみたいで恥ずかしいじゃないですか」

「まさしく浮かれまくっているようにしか見えないが。文学の道は己の恥をさらけ出すところから始まるのだよ、千歳クン」

「その道を志す予定はないので大丈夫です」

「ああ、そう……。まあ、依頼者の希望だから配慮しよう。報酬は某大手出版社のお偉いさんとやらを紹介してくればいいよ。じゃあ、きみが働いている商家の様子と住人を知りたい。案内してくれるかね」

「はい！」

銀座通りにある、洒落た煉瓦造りのお店を眺め、探偵が言った。

「ほー、『鎮野洋酒店』ね。こんな高級店は入ったことがないよ。いいなあ、上等の葡萄酒が呑みたくなくてきたなあ。せっかくだから買って帰ろうかなあ」

「先生。うちにそんな余裕はありません」

「烏丸は厳しいなあ」

弟子にたしなめられて、先生は残念そうな顔をしている。

わたしは向かい側の歩道から、店内の様子を窺っていた。

「千歳クン。あそこにいるのがきみの遠縁にあたる、洋酒屋を営むご夫妻だね？」

「そうです。あの人たちに雇っていただければ、わたしは今ごろ遊郭にでも売り飛ばされていたかもしれません」

店内では中年の夫婦が優雅に動き回っている。

英国風背広に口髭を蓄えた旦那さまと、断髪の上品な奥さま。

故郷から出てきたばかりのとき、装いや立ち居振る舞いがあまりに洗練されていたので驚いたものだ。

「ふたりともハイカラだ。いじめられたりしてない？」

「失礼な想像はやめてください！ ご夫妻は親切で、とても良くしていただいています！」

「なんだー」

先生はあからさまに残念そうな顔をした。

他人の不幸を見聞きたいと、堂々と言い放つだけある。

「俺は銀座で生まれ育ったけど、昔はなかった店だ。商店は入れ替わりが激しいからなあ」

「鎮野洋酒店はまだ一代目で、五年前に開業したそうです。ご家族は国分寺村の恋ヶ窪から出てきて、今の旦那さまが西欧のお酒を仕入れる商いを始め、銀座にお店を構えるまでに成功したのですって」

「なるほどねえ。きみは、店の仕事はしていないんだよね？」

「こちらは力仕事が多いですから。わたしは住まいのほうで、炊事や掃除を手伝っています」

洋酒店と住まいは別になっている。

店舗裏の路地を十分ほど歩き、先生たちを庭付きの屋敷へと案内した。

「若い娘が奉公先に男なんか連れ込んで大丈夫なのかね」

「わたしの部屋は離れたから目につかないし、ばれなきや平気です。どうぞ」

門をくぐると、垣根の手入れをしている少年と、縁側に座っている老人の姿があった。わたしたちは見つからないよう、そそくさと奥に向かう。

離れの平屋はさほど広くない。玄関をあがると、短い廊下の先にすぐ部屋の戸が見える。手紙はいつもこの戸に挟まっているのだ。

そう説明すると、先生は依頼とまったく関係のない感想を漏らした。

「離れでひとり部屋とは、随分いい待遇だね。俺も今の仕事をやめて商家に雇ってもらおうかな」

「なっ!? やめるとは、小説家と探偵のどちらを……？ 弟子である小弟はどうなるのでしょうか!？」

「ああ、冗談だからそんな目で見ないでくれ。悲しそうな顔も怖いのだよ、烏丸は」

先生は憎まれ口しか叩かないが、烏丸さんには案外弱いらしい。

ひねくれ者だから、心根の良い人を前にすると後ろめたくなるのだろうか。

ちぐはぐな師弟を眺めながら説明を続ける。

「遠縁とはいえ親戚ですし、下働きで女はわたしだけだから気を遣ってください。でもとは旦那さまのご両親が使われていたのですが、先の震災で足を悪くされてから母屋でお過ごしになっています。離れは庭の奥で、少し歩きますからね」

「さつき庭で見かけたご老人がそうかな」

「はい、あちらがおじいさまです。おばあさまはそのときに亡くなられたそう。わたしはカフェー勤務で深夜に帰りますから、足音がご迷惑にならない離れに住まわせていただいで助かっています」

ついだというわけではないが、今日はまだ手を合わせていないことを思い出して、部屋にあるお仏壇に向かった。

「どうか、差出人が明さんでありますように……」
祈っていると、先生があきれて言った。

「仏壇に恋文を供えるんじゃない。神頼みなら神社に行き給えよ、浮かれ小娘め。明さんとやらはきみの想い人か。候補のうちに入っているのかね？」

「はい。屋敷の奥にある離れに恋文を置くことができるのは、この家に住んでいる人だけですよ。不可能な方々を除外すると、残るは同じ家で働いているふたり……明さんと辰二郎さんだけなんです」

お酒の配達を担当している明さん。

力仕事や雑用全般をしている辰二郎さん。

わたしが候補者の名前を挙げると、兎田谷先生が言った。

「そこまで絞れているなら、筆跡でわからないの？」

「どちらの字も知らないんです。書きつけがないか家を探してみたのですが、残念ながら見つけれませんでした。お店のほうならあるかもしれませんが、わたしは普段出入りしないので探しに行くのも不自然です」

ふうむ、と思案しながら先生は着物の衿を整えている。

今日も相変わらず派手な外出着だ。じつはこの人の着替えに小一時間待たされた。

「場所だけじゃなくて、手紙が置かれる時間も毎月同じ？」

「ええ、決まって月初めのお昼です。この時間、わたしは母屋に行っていて離れにはいません」

午前十一時半頃、店から戻ってくる奥さまと一緒に、台所で昼食の支度を始める。

用意ができたからおじいさまの食事を手伝い、旦那さまの分は奥さまが洋酒店の二階へ運ぶ。

下働きの明さんと辰二郎さんは、食事を含めて午後まで休憩時間だ。

片づけと自分の食事を終え、わたしが離れに戻るのはいったい午後十三時半。これが毎日変わらない、お昼時の流れだった。

「朝は洗濯や掃除で、なんやかんやといろんな場所にいますが、お昼時はかならず母屋です」

「そして千歳くんが離れに戻ったときには、手紙が届いているわけか。ところで、家に万葉集はある？」

「はい、居間の本棚に訳文が全巻ありました。本好きな奥さまのものだと思います」

「誰でも手に取れる場所にあるんだね。あと、カフェーの出勤日と時間は？」

「週に半分程度で、女中仕事があるので夕方以降しか出ていません。人が足りない日は特別に頼まれることもありますし、曜日はばらばらです」

「じゃあ夜はいたりいなかったり、か」

「ということは……」

そこで、書生服の烏丸さんがつぶやいた。

彼の着物の柄も先生が趣味で選んでいるのか、意外と洒落こんでいる。

ただ、顔が怖いせいで、中に白いシャツを着ていなければ完全に暴漢である。

「この家の者なら、千歳さんの生活規則は把握しているはず。では、いない時間をあえ

て狙っているということか？」

「旦那さまは夜まですつと店のほうですし、おじいさまは離れまで歩けません。奥さまはわたしと台所にいます。ですから、手紙を置けるのは下働きのふたり、どちらかのはずなんです」

「なるほどねえ。とりあえず、彼らを見てみたいな。今どこにいる？」

「さつき辰二郎さんが庭にいました。くれぐれも、調査を知られないようにしてくださいね」

念押しすると、先生はどんと胸を叩いた。

「本業は小説家とはいえ、仮にも俺は探偵の看板を背負っている。目立たず、上手く立ち回るから、きみの乙女心はちゃんと守られるさ。大船に乗ったつもりでい給えよ」

この派手な態度で、本当に目立たない気があるのか甚だ疑問だ。

尾行や潜入の仕事をするときもこんな恰好なのかしらと、わたしはむしろ不安になるのだった。

垣根の陰に潜み、三人で庭を覗く。

辰二郎さんは同じ場所で木の手入れをしていた。

車輪が軋む音とともに、配達用のリヤカーが門の前に停まった。もうひとりの候補である明さんもちようど帰ってきたのだ。

「おい、辰二郎。ビヤ樽を運んできてくれ。ビヤホールの補充用だ」
「わかりました！」

明さんの声が響く。辰二郎さんは樽を取りに蔵のほうへ走っていったようだ。隣にしゃがんでいた兎田谷先生が、小さく口笛を吹いた。

「ビュ、イイ男だねえ。あれがきみのお気に入り、明くんか」

「ええ、イイ男なんです。年齢は二十歳。すらりとしていて役者さんみたいでしょう？」
「ミハーだなあ」

栗色の髪で、手足が長いので洋装が似合う。店の名前が入った前掛けも、彼が着用すると上品でスマートである。

「小弟と同じ七三分けの髪型なのに、なぜこうも雰囲気が違うんだ。年齢もひとつしか変わらないのだが」

「えつ。烏丸さん、そんなに若かったんですか!? わたしとも歳が近いし、親近感が湧きますね」

「はいはい、ちよつと一九〇〇年代生まれだからって、若者だけで盛りあがるんじゃないな

いよ。どうせ年寄りだよ、俺は。一八〇〇年代の人間だよ」

「そんなこと言ってませんけど……」

先生がぼやいているあいだに、辰二郎さんがビヤ樽を抱えて戻ってきた。

「明さん、これでいいすか」

「ああ。おれは厠に行くから、戻るまでに積んでおけよ」
「わかりました」

先生は去っていく明さんの後ろ姿を眺めて、「うーん」と唸っていた。

「彼、見た目はいいけど、性格が良くなさそうだ。もうひとりの少年に対して、随分いばって命令しているじゃないか」

「明さんのほうが年上だし、辰二郎さんはまだ雑用ですから。それにほら、力持ちだから軽々と運んでいますよ。東北のご出身で、わたしよりひとつ年下。小学校も卒業しないうちから奉公に出ているそうです。大きな体に似合わず、童顔で素朴なお顔の方ですよね」

熊のような印象の、のんびりとした男の子だ。

明さんと並ぶと、見た目も性格もまるで正反対だった。

「説明にきみの関心度がそのまま表れているなあ。ほら、辰二郎くんは縁側のおじいさ

まと仲良く話をしているよ。明くんなんて挨拶もしなかったのに。お年寄りに優しい良
い子のようだね」

「まあ、見ていてほのぼのはしますね……」

老人と熊みたいな男の子という組み合わせは、たしかに昔話みたいでほっこりする。
だが、殿方の好みとそれは別なのだ。

「よし、あの子に接触してみよう。調査することがばれなきゃいいんだろう」

手帳を取り出し、文字をさらさらと書きつけたあと、先生は裏門から外に出ていった。
そして、さも偶然を装って庭にいる辰二郎さんに路上から呼びかけた。

「きみ、すまない。ちよつと道を訊きたいんだが」

「はい、どうぞ」

辰二郎さんは北国を感じさせる訛^{なま}りで、朗^{ほが}らかに答えた。

「ここに書いてある店は、近くかな？ 急ぎで葡萄酒を配達してほしいんだが、迷って
しまったんだ」

「あ、これ、うちの番地です。自分、鎮野洋酒店の下働きなんです。ちよつと距離があ
るし、お急ぎだったら自分が走って注文を伝えに行きますよ」

「それは助かる。ここに書いてある品が欲しいんだ」

先生の差し出した紙を見て、辰二郎さんは困惑していた。

きよろきよろと廁のほうを確認して少し悩んだあと、恥ずかしそうに尋ねる。

「ええと、エ、エンゼル、と……!? あおう、すみません。うちにはこんな商品ないと
思うんですけど……。これ、なんの葡萄酒が二十本と書いてあるんでしょうか」

「ふふふ、これはね……。『エンゼルと恋に落ちた人間が流す涙のように滑らかな喉^{のど}越し
で、女神から滴^{した}り落ちる血のように清らかな赤色をした、果実の薫^{かほ}りが芳醇^{ほうじゅん}な葡萄酒
を二十本』だよ！」

ひどいセンスの一文に、辰二郎さんも少し引き気味だ。

でも、もつと動揺した人がわたしの隣にいた。

「二十だど!?」

小声の悲鳴が上がり、垣根が大きく揺れてがさがさと音が鳴る。

「烏丸さん、見つかってしまえますよ！」

「す、すまない。つい……」

辰二郎さんは不審そうな目線をこちらに向けており、先生は「あちゃー」という表情
をしている。ただでさえ強面の烏丸さんが見つかれば、泥棒騒ぎになるかもしれない。
計画にはなかったが、しかたなくわたしが出ていくことにした。

「ち、千歳さん!? ご、午後は休みだったんじゃ……」

髪に葉っぱをつけて現れたわたしに驚いている。なんとか誤魔化そうと、作り笑いを浮かべた。

「あら、びっくりさせてごめんあそばせ。ハンケチが風で飛んで、拾っていたの。ふふ」

「す、すみません、大きな声を出して。いきなりだったんで、心の準備ができてなくて……」

わざとらしくったかと心配していたが、辰二郎さんは気にする余裕もなさそうなほど焦っていた。

「あの、お客さん、お好みに合いそうな葡萄酒を旦那さまに見繕ってもらいますので、任せてください。お届け先はどこですか?」

「ありがとう。お願いするよ。これがうちの住所ね」

「代金は商品と引き換えにいただくことになっています。じゃ、じゃあ、すぐ伝えてきますから!」

着物の懷に受け取った紙片を入れると、店のほうへ走っていった。

「いやあ、辰二郎くんは親切でなかなか気持ちのいい子だね」

彼の姿が見えなくなると、わたしたちは烏丸さんのいる垣根へ戻った。すぐさま、怒りの声が飛んでくる。

「先生、さりげなくまた散財を……!! しかも、よりもよつてお酒とは!! 酔つてどこの小説家と揉め事を起こしてから、酒は止めていたでしょう!!」

「記憶にないなあ。なにしろ、酔っていたからね!」

叱られているのに、先生はどこ吹く風という態度で飄々としていた。

「わあ、文士ってやっぱりろくでなしなのね……」

「美しいのは綴られた架空の物語だけ。現実の作者なんてこんなものさ。とにかく、ふたりのうちにいてよかったよ。さあ、きみの部屋に戻って調査結果を報告しようじゃないか」

いてよかったとは、どういう意味だろう?

疑問に思ったが、とりあえず部屋で話を聞くことにした。

離れに戻ると、兎田谷先生の解説が始まった。

「いいかね、千歳くん。四通の手紙を読んだときに、まず気になったのは字の拙さだった。下手というより不慣れでたどたどしい。これを書いた差出人は、本当は読み書きが

できない人物なんじゃないかと思っただ」

「じゃあ、辰二郎さんに声をかけたのは……」

「そう、彼が文字を読めるか確認するためさ」

「お年寄りならともかく、今時でも読めない方がいるでしょうか」

「尋常小学校の義務教育で明治以降、日本人の識字率は大幅に上がった。それでも、家の労働などで満足に学校へ通えない者は少なからずいる。とくに田舎ではまだ多い」

辰二郎さんは幼い頃から働きに出ていると聞いたから、もしかするとあまり学校に通えなかったのかもしれない。

「でも、いつさいの非識字というのは、一九〇〇年代生まれの若者じゃ稀だ。自分の名は書けたり、よく使う字は読めたりする。漢字以外の仮名文字だけできるとかね。辰二郎くんも、自分が働いている鎮野洋酒店の名と番地はすぐわかった。仕事で必要な商品名や数字なんかも、努力して覚えたんだろう。けれど――」

「エンゼルと恋に落ちた人間が流す涙のように滑らかな喉越しで、女神から滴り落ちる血のように清らかな赤色をした、果実の薫りが芳醇な葡萄酒」

「俺があえてクドクドと書いた文章は、ぜんぶ読めなかったみたいだね」

「ああ、それをたしかめるためにあのひどいセンスの文を……。じゃあ、手紙を置いたのは辰二郎さんってことですか!？」

「不満かね？」

「うっ……」

まごついていて、カフエーでも耳にした独特の大げさな言い回しが炸裂した。

「想像し給え！ 彼は読み書きが苦手なのにもかかわらず、きみに想いを伝えるため、一生懸命に万葉集を書き写したに違いないのだ!! 嗚呼、とても健気じゃないか！ もうひとりの明って子より、俺は辰二郎くんをお勧めするね!」

「うう、でも……。そうだ、明さんも文字を読めない可能性がまだ残っていますよね？ とすると、結局どっちかわからないんじゃない？」

食い下がってみたが、先生はあつさりと首を横に振った。

「明くんは除外だよ。俺が辰二郎くんに紙を見せたときの反応を思い出してごらん。読めないというのが恥ずかしかったのか、客に尋ねるのがはばかれたのかはわからないが、彼は困った表情を浮かべて厠のほうへ視線を向けていた。助けを求めようとしたんだろぅね。つまり明くんなら読めるし、彼もそれを知っているってこと。明くんにも同

じことを試してみてもいいけどさ、結果は変わらないと思うよ」

たしかにふたりは一緒に仕事をしているし、注文の確認などで互いが読み書きをできるかどうか知っているだろう。

「明日になれば、どのみち判明するんだ。じゃ、明日のお昼前にまた来るからね」
事前調査を終え、先生と烏丸さんは帰っていった。

翌日――

朝の掃除と洗濯を終え、昼食の準備に取りかかる前に、わたしは一度離れの部屋に戻った。

いつもと同じ繰り返しなのに、今日は胸が高鳴っている。ついに恋文を置いた人物が判明するのだ。

兎田谷先生と烏丸さんは約束どおり、昼前にやってきた。

「では、お願いしますね。わたしは母屋へ昼食を作りに行きますので」

「ドーンと任せなさい」

「お邪魔します……」

先生は胸を叩きながら、わたしの部屋に入ってきた。烏丸さんはこっそり侵入するの

が落ち着かないらしく、そわそわしていた。

昨日はあんなふうに言っていたけれど、本当に明さんではないのだろうか。

わたしは先生に見えないように、ひっそりため息を吐いた。

もし彼ではなく、辰二郎さんだったら、どうしたらいいのかと悩んでいたのだ。

はつきり想いを告げられたわけではないのだから、放っておくしかないのかもしれない。でも、知っていて黙っているのもばつが悪い。一生懸命に恋文を書いてくれたのだとしたら、なおさらだ。

とにかく、判明してから考えよう。

そう切り替えて部屋を出ようとしたとき、誰かが部屋の戸を叩いた。

「おふたりとも、押し入れに隠れてください！」

先生たちに小声で合図し、隠れたのを確認してから来客を出迎えに行った。

「えっ、明さん……!？」

なんと、そこに立っていたのは明さんだったのだ。

やっぱり彼が手紙を置きに？

期待を胸に膨らませて周囲を見るが――なにも見当たらない。

でも、帰りに置いていくかもしれないし……。

この期に及んで、わたしはまだ往生際の悪いことを考えていた。

「なにかご用でしょうか？」

「奥さまが、台所に来る前に畑のネギを何本か取ってきてほしいって」

「あ、ああ。奥さまが……そうですか……」

彼が言っているのは、奥さまと辰二郎さんが庭の畑で育てているネギの話だった。要するに、ただの言伝だ。

「じゃあ、伝えたから」

「あ、あの！」

勝手に期待してがっかりした想いが募って、思わず呼び止めてしまった。

「なに？」

「その、恋文を……」

「恋文？」

どうせならもう、訊いてしまえばいい。

動揺していたわたしは、普段は絶対出ない勇気を振り絞っていた。

しかし緊張して、次の言葉が出ない。その様子を見て、明さんが詰め寄ってきた。

「あんた、おれに気があるのか？」

「え？」

いきなり畳の上に、押し倒される。

「ちょ、ちよっと!? やめてください!」

「そっちが誘ってきたんじゃないかねえか。カフエーで女給なんかやっているくらいだから、男の相手は慣れてるだろう？」

もがいても、男の人の力には勝てない。

こんなことをする人だったなんて、わたしは五ヶ月も同じ屋根の下に暮らして、いったい彼のなにを見ていたのだろうか。

助けて、兎田谷先生……。いや、やっぱり頼りにならなそうだから、助けて烏丸さん……!!

「千歳さん、大丈夫ですか!？」

心の中で助けを求めたそのとき、先生でも烏丸さんでもない声が響いた。

体が軽くなり、解放されたのだとわかる。

目を開けると、辰二郎さんが後ろから明さんを羽交い締めはがにしていた。

「辰二郎、てめえ、どういふつもりだ!」

「明さん、それは自分の台詞です。千歳さんにひどいことをしたら、許しませんから」

腕力では敵^{かな}わないからか、明さんは乱暴に腕を振りほどき、舌打ちをして去っていった。

「千歳さん、怪我はないですか」

「え、ええ。大丈夫よ。どうしてここに？」

「いつもの時間より少し早かったので、畑の手入れをしていたんです。そしたら悲鳴が聞こえて、急いで走ってきました」

「いつもの時間？」

「あ、旦那さまと奥さまには、ちゃんと報告しますんで！ 明さんは自分がここに来たときから世話になっていたので残念ですけど、でも千歳さんに乱暴するのは絶対許せません」

そう言つて、頬を少し赤らめた。

「母屋に行つて、奥さまに昼食の準備は自分が代わるとお願いしてきます。千歳さんは休んでください」

「いろいろとありがとう。わたしもまだ混乱しているものだから、心遣い嬉しいわ」

「今月の分、置いていきます。初めて手紙を届けた日に説明しようと機会を窺っていたんですが、千歳さんはちゃんと理解して受け取ってくれて嬉しかったです。仏前にまで

供えてくれて……。これ、お願いします」

今までにもらった四通と同じ、白い封筒をわたしに差し出して、辰二郎さんは母屋のほうへ走っていった。

誰もいなくなつたのを見計らつて、兎田谷先生と烏丸さんが押し入れから出てくる。

「ほらあ、男を顔で選ばない！」

先生は開口一番、ふざけた調子でそう言つたあと、すぐに真剣な表情になつてわたしに謝罪してきた。

「烏丸を行かせようとした矢先だったよ。調査中に依頼者を危険な目に遭わせてしまうなんて、俺の失態だ。悪かったね」

「いいえ、わたしは無事でしたし、気にしないでください。それより先生、これ……」

手紙を見せると、先生と烏丸さんは心得ているとばかりに微笑んだ。

わたしも無言で頷いて、封から一筆箋を取り出す。

「恋ひ恋ひて逢へる時だに愛^{うなは}しき言^{ことづ}尽してよ長くと思はば」
(恋して恋してやっと会えた。この時だけでも愛しい言葉を尽くしてください。
この恋を長くと思うのなら)

「また、随分と情熱的な歌を選んだものだな……」

烏丸さんが苦笑いする。

「彼は本当に千歳さんを好んでいるようだ。もし明という青年がクビになって、ここを去ったとしても、きつとまた来月も手紙は届くと思うよ」

「はい。これを読んだらわかります。ちゃんと辰二郎さんの気持ちは、伝わってきました」

探偵の兎田谷朔はいつもの憎まれ口に戻って、場を締めくくった。

「吊り橋効果で大いに結構。あとは辰二郎くんとうろしくやってくれ給え。依頼は解決だ。では、これにて失礼！」

第一章・裏 恋文の送り主は？

小弟の名は烏丸。

探偵であり、小説家でもある兎田谷朔先生の弟子である。

兎田谷文豪探偵事務所に住み込みで文学を学びながら、身の回りのお世話をさせていただいている。

炊事や掃除も文学に通じる立派な精神の鍛練^{たんれん}のだと、先生はおっしゃっていた。

ご本人がやっているのを見たことはないが……。

煮干しと鰹節^{かつおやし}と少量の米を煮た猫用の飯を部屋に持っていくと、先生は畳に寝転んで仔猫と遊んでいるところだった。

「ようし、猫の名前を決めたぞ！ 小夏^{こなつ}にしよう。可愛らしいだろう。小夏ちゃんや」

「春先に拾ったのにですか」

「俺はそういう天邪鬼^{あまのびやぐ}をするのが好きなのさ。なあ、小夏ちゃんも気に入ったよな？」

「ニヤア」

「名前は結構ですが……そんなことより、先日^{さき}の散財！ あれはどうするおつもりですか!？」

調査中、先生はもののはずみで二十本もの高級な洋酒を注文したのである。

止められなかったのは、小弟の失態であった。

「そうだそうだ、葡萄酒が届いていたんだった。今夜は祝杯だ。流れで恋に落ちてしまった、若いふたりに乾杯しよう」

「流れで……」

若い娘にありがちだが、千歳という少女は雰囲気呑まれやすい気質だった。あんなふうには窮地を救われては、今までまったく関心のなかった相手だろうと、恋にも落ちるというものだ。

結果的にはよかったのだろう。彼女が初めに想いを寄せていた男よりも、辰二郎という誠実な少年のほうがずっと好ましい。

「それにしても、先生、めずらしく依頼を普通に解決なさいましたね。また嘘八百でどうにかするのかと思っていました」

「え、もちろん嘘だったよ。いつものでっちあげさ、はははは」

笑いながら、こともなげに言った。

「でっちあげとは……？ どこからどこまでが、ですか？」

「ほとんど最初から最後まで、だよ。烏丸にだけ種明かしをしてあげよう。俺の弟子になつてよかったな。役得だ」

「はあ……」

首をかしげながらも、小弟は先生の前に正座して、拝聴の姿勢をとった。

「まず、差出人はあのふたりのどちらでもない。なんなら千歳クンに宛てたものですら

ない。まったく他人の手紙さ」

「他人とは……!? 先生は『ふたりのうちにいてよかった』とおっしゃっていましたよね？」

「辰二郎くんが以前から千歳クンを好きだったってこと、態度でわかったからさ。彼女に想いを寄せている相手がいてよかったって意味だよ。手紙の送り主の話じゃない。もし千歳クンに気がある相手が存在しなけりゃ、どうしたって依頼は完璧に達成できないじゃないか」

彼女は依頼の際、『わたしに好意を寄せているのがどちらなのか知りたい』と言っていた。

誰からも想いを寄せられていなければ、判明のしようがない。

「つまり、手紙は関係なく、ただ流れで結ばれたのですか、あの男女は」

「そういうことになるねえ。まあでも、結果としちゃ悪くなかったんじゃない？」

「小弟もそう思いますが、ならば、いったい誰の手紙だったのですか？ 辰二郎が毎月置いていたのは間違いないはずですよ」

今月の分だと言って、千歳さんに手紙を渡した現場を目撃している。

先生は小夏を撫でながら、解説を続けた。